

【論文】

中学生の多次元的自己概念から
エゴ・レジリエンスを考察する¹

河嶋 里亜・川上 紋吏・西川 里織

**Examination of the Links between Ego-Resiliency and Multidimensional Self-Concept
in Junior High School Students**

Ria KAWASHIMA, Ayari KAWAKAMI and Saori NISHIKAWA

要旨 (Abstract)

The relationship between ego-resiliency and self-concept among junior high school students is reported in this study. Participants (N = 418; mean age = 13.31), including 203 boys and 215 girls, responded to the Self-Description Questionnaire II Short Version (SDQII-S; Marsh et al., 2005) and the Ego-Resiliency89 (ER89; Block & Kremen, 1996). SDQII-S subscales were positively associated with the ER89. Same-Sex Relationship, Opposite-Sex Relationship, and General Self-Concept showed strong association ($r > .40$). Results suggest that the peer and physical areas of self-concept may play a role in the development of ego-resiliency. No significant gender or grade difference in ego-resiliency was found. Girls scored significantly lower on the Physical, Appearance, Same-Sex Relationship, and Math subscales, while boys scored significantly higher on the Honesty and Verbal Self-Concept subscales. Second-grade students reported significantly lower Physical and Math Self-Concept compared to their first- and third-grade counterparts. Finally, path analysis indicated that the dimensions of the SDQII-S (except for Academic-Self Concept) predicted ego-resiliency.

キーワード (Keywords) : エゴ・レジリエンス、自己概念、中学生、青年期

はじめに

私たちの身の回りには、予測不能な自然災害や社会・経済的な不安、事件や事故など回避することが困難な出来事が多く存在している。また職場や学校、家庭の様々な環境においても心理社会的ストレスを経験することがある。そのような一般的に「ストレス」と呼ばれているような出来事が精神的な問題や病気、また不適応を引き起こすことがある。一方、解決が困難だと感じた後でもその困難を乗り越え、つらい経験を自分の糧として成長する場合もある。

Hall (1904) が青年期を「疾風怒濤 (storm and stress)」の時期と表現したが、Giedd (2015) は10代を無謀な行動を取りがちな「脆弱性」だけではなく豊かな発想力を示す「飛躍のチャンス」とし、ア

¹ 本論文は、第2著者が令和3年度に熊本大学文学部に提出した学士論文のデータを新たに解析し、加筆・修正を加えたものである。

ンバランスな成長過程であることを提言している。日本の中学生は、学校やクラスの変化や試験など小学校とのギャップが大きくなり（石毛・無藤, 2005）、第二次性徴による身体的変化、人間関係、成績、将来に関する悩み、忙しい生活の中での欲求との葛藤といった生活全般に関するストレスなどを抱えながら日々の生活を送っている（清水・相良, 2019）。このように日常生活においてストレスフルな状況に陥った場合に、その状況を乗り越え、前に進んでいく力が必要となる。その困難を乗り越えるときに必要とされる力や過程を示す概念の一つに「エゴ・レジリエンス」がある。

レジリエンスとエゴ・レジリエンス

Flach (1997) は、レジリエンスを「生活環境の移行や生活上のさまざまな出来事、人生に影響のある大きな出来事で生じるストレスのために心理的に消極的な状態に陥っても、混乱した状態を打破し、新しい生き方を発見して、自己を立て直す内的な力」と定義した。レジリエンスは、概念の幅が広いために捉え方は研究者によって異なる。レジリエンスを「過程」ととらえる立場では、悪条件の下で個人的要因と環境的要因とが作用し、肯定的な適応に至るダイナミックな過程に注目する（Luthar, Cicchetti, & Becker, 2000）。一方、レジリエンスを「個人の能力・特性」ととらえる立場では、心の健康を保つ適応力に注目する（Connor & Davidson, 2003）。上記2つの見解をまとめるとレジリエンスは「克服することが困難な状況において、上手に適応する過程・能力・結果」と考えられる（Maten et al., 1990）。日本の中学生を対象とした研究では、レジリエンスはソーシャルサポート（石毛・無藤, 2005）、パーソナリティ（石毛・無藤, 2006）、無気力感（石毛, 2003）、日常ストレス（長田ら, 2006）、他者への愛着（中村・内田, 2007）と関連していることが報告されている。

レジリエンスと類似した概念に「エゴ」のついた、「エゴ・レジリエンス（Ego-Resiliency）」がある（Block & Turula, 1963）。Block and Turula (1963) によると、エゴ・レジリエンスは広義のレジリエンスではなく、その中核となる「個人特性としての回復力」と考えられている。Luthar, Cicchetti, and Becker (2000) によると、レジリエンスは発達上のプロセスであるのに対しエゴ・レジリエンスは個人の特性の一つであると捉えられており、レジリエンスは逆境にさらされるなどのリスクを前提とするのに対し、エゴ・レジリエンスはそれを前提としない点にある。Oshio et al. (2018) はメタ分析を実施し、エゴ・レジリエンスの特徴がビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性における社会的信頼、適応性や感受性に関連していることを明らかにしている。

青年期の調査では、エゴ・レジリエンスの高い青年の方がストレス状況からのより早い心理的・情動的回復を示し（Tugade & Fredrickson, 2004）、状況に応じて満足行動を適切に遅延でき（Funder & Block, 1989）、さらにパーソナリティが比較的成熟していること（Westenburg & Block, 1993）が明らかにされている。それに対してエゴ・レジリエンスの低い青年は、習慣性の薬物使用（Block, Block & Keyes, 1988）や抑うつ症状（Block & Gjerde, 1990）が高くなることが報告されている。近年実施されたイタリアの縦断研究では、13歳の時の家族の社会経済的地位（SES）は、6年後のエゴ・レジリエンスを有意に予測し、高校卒業時の生徒の学業成績も13歳で評価されたエゴ・レジリエンスによって予測されることが報告されている。これらの結果は、エゴ・レジリエンスが高く、自分の感情状態とその結果としての行動に柔軟に適応できることが、その後の学業成績に影響することを示唆している（Alessandri et al., 2017）。

日本国内の研究では、青年期の親子関係と無気力感の関係にエゴ・レジリエンスの果たす役割が検

討されている。その結果、幼少期からの母親のほめるしつけが子どものエゴ・レジリエンスを高め、エゴ・レジリエンスが無気力感を軽減させる要因として機能していることが明らかにされている（小野寺, 2009）。また、高校生を対象とした研究によると、安定したエゴ・レジリエンスは、逆境経験に対する心的ストレス症状を低くし、その後の抑うつを軽減する可能性があることが報告されている（Nishikawa et al., 2017）。畑・小野寺（2013）は、エゴ・レジリエンスの高い大学生がよりソーシャルサポート源への認知が高く、多様なコーピング方略を用い精神的健康であることを明らかにしている。以上のように、エゴ・レジリエンスは思春期・青年期においても良好な適応状況を実現する重要なパーソナリティ特性として考えられている。

自尊心と多次元的自己概念

「自尊心（Self-esteem）」は自己に対する肯定的または否定的な態度や「自己価値の感情（feelings of self-worth）」のことで（Rosenberg, 1965）、ライフステージにおいて年齢とともに変化する（Robins et al., 2002）。一方、「自己概念（Self-concept）」とは、「私は数学が得意だ」や「私は長い間止まらずに歩くことができる」など自分自身に対する「記述的」また「評価的」な概念であり（Shavelson, Hubner, & Stanton, 1976）、幼少時から周囲の環境による内的及び外的な影響を受けるなかで育つ（井上, 2009）。

Shavelson et al. (1976) は、自己概念を「社会的な経験、重要な他者との関わり、および、自分の行動の帰属を通して形成された、自分自身の個人の認識」と定義し、自己概念の多次元階層モデルを構築した。Shavelsonら（1976）の多次元階層モデルでは、「一般的自己または全体的自己」を自己概念の頂点とし、「学業的自己概念」、「社会的自己概念」、「情緒的自己概念」、「身体的自己概念」などの構成要因を仮定した。

Marsh (1992) は、Shavelson et al. (1976) のモデルを元にSDQ (Self-Description Questionnaire) を作成し、児童期 (SDQ-I; Marsh, 1984)、青年期 (SDQ-II; Marsh, 1992a)、成人・中年期 (SDQ-III; Marsh, 1992b) のそれぞれの発達段階に応じた質問紙を開発している。MarshのSDQ尺度 (Marsh, 1989, 1992a, 1992b) では、「国語」や「数学」などの学業的自己概念 (Academic Self-Concept) と、「友人」「重要な他者」などの社会的自己概念 (Social Self-Concept)、情緒的自己概念 (Emotional Self-Concept)、「身体的能力」「外見や容姿」などの身体的自己概念 (Physical Self-Concept) に関する非学業的な自己概念 (Non Academic Self-Concept) とに分かれている (Marsh, 1989, 1992a, 1992b)。SDQ尺度は因子構造の安定性や高い妥当性だけでなく、学業的・非学業的な側面から個人を細かく具体的に検証することが可能な点が利点として挙げられる (富岡, 2011)。また、子どもを対象とする場合に、子ども自身が自分をどのように客観視し認識しているかを多面的に調査することができることから、教育支援という観点やカリキュラムや指導方法の改善に用いることができる (井上, 2009)。

子どもの自己概念形成の主な要因に子どもの重要な他者 (両親・教師・友人) との人間関係がある (富岡, 2011)。自己概念は幼児期に発達し始め、幼児期の後半 (8～11歳) になると自己が組織化されると自己システムが統合されてくる (若本, 2011)。さらに、自己概念が児童期から思春期にかけて多次元になるにつれ、自己概念のレベルは青年期前期に低下し、青年期中期・後期になると高くなることが報告されている (Marsh, 1989)。また、自尊心においても同様の変化が報告されている (Robins et al., 2002)。Erikson (1968) によると、青年期に直面する主要な課題は自我同一性 (アイデ

ンティティ)の感覚を発達させることであり、「私はだれか」「私はどこへ向かうのか」といった疑問に対する答えを見つけることが大きな課題になる。これらのことから、青年期は児童期に芽生えた自己概念の複合性が徐々に精密化され安定していく時期である反面、思春期という人生の大きな変化の中で自己に混乱をもたらす可能性もあることが考えられる。

思春期・青年期を対象にしたSDQIIを使用した自己概念の研究では、「身体的能力」「身体的外見」「一般的自己」では男子が女子よりも高く、「国語」と「正直さ・信頼性」においては女子が男子よりも高いことが報告されている (Marsh,1989)。一方、年齢と性別の相互作用は極めて小さいことが報告されている (Marsh,1989; Nishikawa et al., 2007, 2009)。

青年期を対象にSDQIIを使用した国際比較研究も実施されている。日本とスウェーデンの青年期の自己概念の比較研究では、日本の中学生はスウェーデンの中学生に比べ、自己概念の得点が低くセルフ・ディスクレパンシー(現実の自己と理想の自己の差異)が大きい結果が報告されている (Nishikawa et al., 2007)。さらに、スウェーデンと日本の両国の中学生において、現実と理想の自分にギャップが大きいほど自分自身をネガティブに捉える傾向にあることが明らかになっている (Nishikawa et al., 2007)。

Marsh et al. (2005) は、Youth Self Report (YSR) を使用した多次元メンタルヘルス問題尺度と短縮版SDQ II-S (Self-Description Questionnaire II - Short) を使用した多次元自己概念の関連性を明らかにすることにより、自尊心などの一つの次元よりも多次元自己概念からメンタルヘルスを考察することが有用であることを示している。それに続き、日本の高校生を対象に日本語版SDQ II-Sを用いた研究では、Marsh et al. (2005) の結果と同様に多次元メンタルヘルスと多次元自己概念は関連していることが明らかになっている (Nishikawa et al., 2009)。さらに、両親からの養育スタイルをポジティブに捉え、友人との関係性が安定しているほどメンタルヘルス問題が少なく、自己概念が高い傾向にあることが報告されている (Nishikawa et al., 2009, 2010)。以上のことから、青年期の自分自身の認識、対人関係、そしてメンタルヘルス問題はそれぞれ影響し合っており、人間関係が肯定的であると自己概念も肯定的な一方、対人関係を否定的に捉えると自己概念も否定的になることが示唆されている。

近年、子どもや青年期におけるエゴ・レジリエンスや精神的健康を高めるために介入研究が実施されている。例えば、エゴ・レジリエンスとコーピング・スキル(ストレスへの対処スキル)に焦点を当てた精神的健康増進プログラムが、日々のストレスを管理する学生の能力にプラスの影響を与え、エゴ・レジリエンスを高めることが明らかにされている (Fenwick-Smith et al., 2018)。また、マインドフルネスをベースに心理的柔軟性を生み出すことを目的とした「アクセプタンス&コミットメント・セラピー」が自己概念とエゴ・レジリエンスの向上に効果があることが示されている (Ebrahimi et al., 2022)。韓国の看護学生を対象とした研究では、エゴ・レジリエンスを高めるための心理的安全性と肯定的な身体的自己概念の重要性が示唆されている (Cho, 2022)。青年期を対象とした最近の研究では、肯定的な自己概念とエゴ・レジリエンスは、いじめによる犠牲感による幸福度の低下を緩和する可能性が示唆されている (Shemesh & Heiman, 2021)。

これまでに多次元自己概念は欧米で広く研究されているが、日本の青年期を対象にした研究は少なく、国内外においてもレジリエンスと多次元自己概念の関連性を調べた研究はまだ少ない。エゴ・レジリエンスは、子ども自身の個人要因と家族や地域社会の環境要因との相互作用により高めら

れることが報告されていることから (Masten, 2001)、エゴ・レジリエンスを育むために、個人要因と環境要因のどちらも多角的に考察することが重要であると考えられる。本研究の目的は、中学生を対象にエゴ・レジリエンスと自己概念の関連性を明らかにし、思春期の発達の特徴を調べることにする。本研究では、エゴ・レジリエンスが高いと自己概念が高い傾向にあり、自己概念は学年で得点差がみられると仮説を立てて検証する。これらの結果から、エゴ・レジリエンスを特徴づける自己概念因子を明らかにすることで、エゴ・レジリエンスを育むための支援アプローチを考えていく。

方法

対象者と実施方法

熊本県内の中学1年生～3年生、合計442名を対象とした。各項目において欠損値が1つあるデータは分析の対象から除外し、残りの人数を有効回答者とした。その結果、合計418名(男子203名、女子215名、平均年齢13.31歳)を分析対象とした。

調査は教育指導の時間に、担当者が研究の目的と方法を口頭および文書で提示し、質問紙と封かんテープ付きの封筒を生徒に配布した。対象生徒の回答をもって調査協力を得たものとした。説明から質問紙の回答は10～15分程度であった。また、本研究は熊本大学大学院社会文化学教育部倫理審査委員会の承認を得た(承認番号第62号)。

質問紙

レジリエンスの測定 Ego-Resiliency89 (ER89) は、日常的な内的あるいは外的なストレスに対して柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し適応できるとされるパーソナリティ特性を測定する質問紙である (Block & Kremen, 1996)。ER89は全14項目で、1-4点の4件法(1=全く当てはまらない, 2=あまり当てはまらない, 3=やや当てはまる, 4=非常に当てはまる)で評定する。高得点であればあるほど、エゴ・レジリエンスが高いと評価する。

ER89の具体的な質問項目の内容としては、「私は～である」「私は～だ」「私は～と思う」など、すべての項目において「私は」で始まる自己の心理特性についての質問で構成されている。ER89は邦訳され広く使用されている(畑ら, 2013)。

自己概念の測定 Self-Description Questionnaire II for Short (SDQII-S) (Marsh et al., 2005) は、オリジナルの102問版を51問に短縮化した質問紙で「全体的に自分を誇りに思う」「国語は私の得意科目だ」などのそれぞれの項目について1(全く当てはまらない)から6点(よく当てはまる)の6件法で評定する。尺度の得点が高いほど自己概念が高いと評価する。

SDQII-Sの下位尺度は11種類あり、「国語」「算数」「学校全般」の達成度に関する学業的な自己概念 (Academic Self-Concept) と、「身体的能力」「身体的外見」「情緒の安定性」「正直さ・信頼性」「同性との関係」「異性との関係」「親との関係」「一般的自己(自尊心)」に関する非学業的な自己概念 (Non Academic Self-Concept) とに分かれている。これらの11の尺度の総得点を「総合的自己 (Total Self)」とする。SDQII-Sは邦訳され、信頼性と妥当性が示されている (Nishikawa et al., 2009)。

解析方法

記述統計、相関分析、多重分散分析 (Pillai's MANOVA) と一元配置分散分析 (Bonferroni) を行うためにIBM SPSS Statistics Ver.24を使用した。また、Amos Ver.24を使用し、共分散構造分析を行った。共分散構造分析の特徴は、複数の変数間の因果関係や相関関係を明らかにすることを目的とし、得られたデータに適合するように適合指標を使用し探索的にモデル構築を行うことである。共分散構造分析では、変数の因果関係や共変関係を矢印で結び、図で表す。因果関係は片向きの矢印「→」で相関関係は双方向の矢印「↔」で表す。この矢印はpathway (以下、パス) と呼ばれている。パスの傍らには、「パス係数」と呼ばれる数値が示され、1から-1までの値をとり、数値の絶対値は関係の強さを示す。さらに、パス係数の横には有意水準を示す*が示され、そのパス係数が統計的に有意であるかを示す。*の数が多いほど、有意水準が高いことを示す。GFI (Goodness of Index) は、モデルを評価するための合理的な統計的指数と見なされ、仮説モデルとデータの間の適合性を評価するために使用される。モデルとデータの適合性は、次のパラメーターを使用して評価する。CFI (Comparative Fit Index) : 1に近いほどモデルがデータにうまく適合している。0.9を超える値が望ましい (Bentler, 1990), CMIN/df (minimum discrepancy per degree of freedom) : 値が小さいほど望ましい (Holmes-Smith, 2017), REMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) : 0.08未満の値が望ましい (Bollen, 1989), IFI (Incremental Fit Index) : 0.9を超える値が望ましい (Browne & Cudeck, 1992)。

結果

エゴ・レジリエンスと自己概念における性差・学年差の検討

エゴ・レジリエンスと自己概念の下位尺度の性別・学年別の平均値・標準偏差を含む基礎統計量を表1に示す。

多重分散分析 エゴ・レジリエンスと自己概念尺度の性別・学年別の差を検討するために、性別と学年を独立変数とし各項目を従属変数とした 2×3 の2要因分散分析 (Pillai's MANOVA) を行なった (表2参照)。結果は、性別の主効果 [$F_{(12,310)} = 8.25, p < .001, \text{Eta}^2 = .24, \text{power} = 1.00$]、学年の主効果ともに有意であった [$F_{(24,622)} = 2.34, p < .001, \text{Eta}^2 = .08, \text{power} = 1.00$]。しかし、交互作用は有意ではなかった ($p = .150, \text{Eta}^2 = .05, \text{power} = .93$)。エゴ・レジリエンスと自己概念尺度の全ての変数を考慮に入れた際には、性別と学年の交互作用はないという結果が出た。

一変量の分散分析 次に自己概念各尺度による個別の単純主効果の検定を行った所、性別の主効果については、「身体的能力」 [$F_{(1,321)} = 35.77, p < .001, \text{Eta}^2 = .10, \text{power} = 1.00$]、「身体的外見」 [$F_{(1,321)} = 8.23, p = .004, \text{Eta}^2 = .26, \text{power} = .82$]、「同性との関係」 [$F_{(1,321)} = 7.37, p = .007, \text{Eta}^2 = .22, \text{power} = .77$]、「正直さ・信頼性」 [$F_{(1,321)} = 8.29, p = .004, \text{Eta}^2 = .25, \text{power} = .82$]、「国語」 [$F_{(1,321)} = 16.32, p < .001, \text{Eta}^2 = .05, \text{power} = .98$]、「数学」 [$F_{(1,321)} = 11.38, p = .001, \text{Eta}^2 = .03, \text{power} = .92$]、において主効果が有意であった。女子が男子に比べて、「正直さ・信頼性」、「国語」の得点が高く、男子が女子に比べて「身体的能力」、「身体的外見」、「同性との関係」、「数学」自己概念尺度の得点が有意に高い結果が認められた (all $p < .05$)。

学年の主効果については、「身体的外見」 [$F_{(2,321)} = 4.54, p = .011, \text{Eta}^2 = .03, \text{power} = .77$]、「異性との関係」 [$F_{(2,321)} = 7.73, p = .001, \text{Eta}^2 = .05, \text{power} = .95$]、「正直さ・信頼性」 [$F_{(2,321)} = 3.96, p = .020, \text{Eta}^2 = .03, \text{power} = .92$]

= .02, power = .71]、[「親との関係」 $[F_{(2,321)} = 3.02, p = .050, \text{Eta}^2 = .02, \text{power} = .58]$ 、[「情緒の安定性」 $[F_{(2,321)} = 3.35, p = .036, \text{Eta}^2 = .02, \text{power} = .63]$ 、[「数学」 $[F_{(2,321)} = 8.61, p < .001, \text{Eta}^2 = .05, \text{power} = .97]$ 、[「総合的自己」 $[F_{(2,321)} = 7.37, p = .001, \text{Eta}^2 = .04, \text{power} = .94]$ で見られた。Bonferroni法を用いて多重比較を行なったところ、1年生と3年生が2年生に比べて「数学」と「総合的自己」の得点が高く出た (all $p < .05$)。また、3年生が2年生よりも「身体的外見」と「正直さ・信頼性」の得点が高い結果が認められ、1年生が2年生よりも「情緒の安定性」が高く、2年生と3年生に比べて「異性との関係」の得点が高く出た (all $p < .05$)。

さらに、性別と学年の交互作用が「正直さ・信頼性」尺度において見られた $[F_{(2,321)} = 4.73, p = .009, \text{Eta}^2 = .03, \text{power} = .79]$ 。中学2年生の女子が同学年の男子に比べて、「正直さ・信頼性」得点が高い傾向がみられた。

表1. エゴ・レジリエンスと自己概念の性別と学年ごとの平均得点（標準偏差値）

	全員 (N=418)	性別		学年		
		男子 (n=203)	女子 (n=215)	1年生 (n=144)	2年生 (n=144)	3年生 (n=130)
1 エゴ・レジリエンス	39.36 (7.19)	39.72 (7.57)	38.95 (6.95)	40.17 (7.33)	38.50 (7.00)	39.42 (7.08)
2 身体的能力	15.25 (5.73)	17.54 (5.11)	13.01 (5.44)	15.53 (5.80)	14.42 (5.96)	14.99 (5.44)
3 身体的外見	10.92 (4.90)	11.47 (4.85)	10.20 (4.80)	11.39 (5.32)	9.98 (4.58)	11.70 (4.96)
4 同性との関係	25.44 (4.66)	26.10 (4.29)	24.80 (4.92)	26.39 (4.64)	24.86 (4.95)	25.09 (4.51)
5 異性との関係	15.67 (4.10)	15.61 (3.98)	15.73 (4.23)	17.21 (4.08)	14.91 (3.93)	15.23 (4.16)
6 親との関係	18.29 (4.84)	18.39 (4.73)	18.23 (4.83)	18.61 (4.56)	17.48 (4.95)	18.87 (4.57)
7 正直さ・信頼性	21.95 (3.94)	21.23 (4.27)	22.61 (3.49)	21.62 (4.22)	21.22 (3.97)	22.46 (3.51)
8 情緒の安定性	16.84 (5.25)	17.20 (5.39)	16.40 (5.07)	18.04 (5.35)	16.05 (5.38)	16.79 (4.91)
9 数学	15.33 (6.03)	16.36 (5.75)	14.39 (6.14)	15.64 (6.30)	13.50 (6.58)	16.54 (5.47)
10 国語	17.92 (6.32)	16.51 (6.35)	19.24 (5.97)	18.72 (7.01)	17.48 (6.16)	17.60 (5.98)
11 学校全般	13.73 (4.87)	13.67 (4.74)	13.67 (4.97)	13.72 (5.37)	12.95 (4.99)	14.23 (4.50)
12 一般的自己	20.47 (6.45)	20.98 (6.44)	19.96 (6.47)	20.78 (6.79)	19.38 (6.31)	20.88 (6.18)
13 総合的自己	190.65 (32.47)	194.22 (31.23)	187.44 (33.31)	197.66 (34.33)	182.25 (29.44)	194.40 (33.26)

表2. エゴ・レジリエンスと自己概念の性別・学年別の検定結果 (F 値)

	性別	学年	多重比較	交互作用	
1 エゴ・レジリエンス	.20	1.28		1.90	
2 身体的能力	35.77***	男>女	.97	1.79	
3 身体的外見	8.23**	男>女	4.54*	3年 > 2年	.82
4 同性との関係	7.73**	男>女	2.74		.88
5 異性との関係	.46		7.73**	1年 > 2年, 3年	.86
6 親との関係	.00		3.02*		.31
7 正直さ・信頼性	8.29**	女>男	3.96*	3年 > 2年	4.73**
8 情緒の安定性	2.93		3.35*	1年 > 2年	.18
9 数学	11.38**	男>女	8.65***	1年, 3年 > 2年	1.85
10 国語	16.32***	女>男	.86		.46
11 学校全般	.22		2.18		.24
12 一般的自己	1.77		2.20		.61
13 総合的自己	3.60		7.37**	1年, 3年 > 2年	1.18

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

エゴ・レジリエンスと自己概念尺度間の相関分析

相関分析 (Pearson's r) の結果を表3に示す。本研究ではエゴ・レジリエンスと全ての自己概念の下位尺度において有意な正の相関が示されたが、中でも $r = .40$ 以上に高い相関を示したものについて記す。結果は、レジリエンスは全ての自己概念尺度と相関しており、「身体的能力」($r = .40, p < .001$)、「身体的外見」($r = .41, p < .001$)、「同性との関係」($r = .51, p < .001$)、「一般的自己」($r = .56, p < .001$)、「総合的自己」($r = .66, p < .001$)と有意に強い相関をした(表3参照)。また自己概念尺度間において、「数学」と「国語」尺度が逆相関($r = -.12, p = .016$)を示した。さらにSDQII-Sの各項目をShavelson et al. (1976)の4つの次元尺度(身体的自己、社会的自己、情緒的自己、学業的自己)に分け、エゴ・レジリエンスとの相関分析を行なったところ、4つの全ての尺度と正の相関を示した($r = .36$ to $.66, p < .01$ & $.05$; 表4参照)。これらのことから、多次元的自己概念とエゴ・レジリエンスの関連性が認められた。

表 3. エゴ・レジリエンス (ER89) と自己概念 (SDQ II-S) 尺度の相関分析の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 エゴ・レジリエンス	-												
2 身体的能力	.402**	-											
3 身体的外見	.410**	.284**	-										
4 同性との関係	.513**	.369**	.299**	-									
5 異性との関係	.499**	.339**	.410**	.528**	-								
6 親との関係	.279**	.212**	.327**	.263**	.252**	-							
7 正直さ・信頼性	.267**	.083	.185**	.166**	.192**	.354**	-						
8 情緒の安定性	.259**	.113*	.176**	.206**	.176**	.088	0.94	-					
9 数学	.268**	.172**	.191**	.171**	.265**	.146**	.161**	.055	-				
10 国語	.178**	-.015	.189**	.138**	.303**	.151**	.163**	-.011	-.115*	-			
11 学校全般	.335**	.115*	.390**	.241**	.356**	.217**	.266**	.095*	.531**	.335**	-		
12 一般的自己	.560**	.369**	.627**	.401**	.495**	.431**	.349**	.206**	.433**	.297**	.663**	-	
13 総合的自己	.658**	.503**	.665**	.593**	.682**	.533**	.426**	.350**	.485**	.448**	.675**	.862**	-

** $p < .005$, * $p < .05$

表 4. エゴ・レジリエンスとShavelson et al. (1976) の多次元自己概念の相関分析

	1	2	3	4	5	6	7
1 性別	-						
2 学年	-.020	-					
3 エゴ・レジリエンス	-.053	-.039	-				
4 身体的自己	-.331**	.020	.512**	-			
5 社会的自己	-.087	-.089	.569**	.534**	-		
6 情緒的自己	-.019	.000	.545**	.493**	.550**	-	
7 学業的自己	.037	.000	.359**	.271**	.408**	.505**	-

** $p < .005$

共分散構造分析

本研究ではShavelson et al. (1976) モデルの尺度間の相関関係(表 4)を元に、自己概念によるエゴ・レジリエンスのモデルを構築するために共分散構造分析(パス解析)を行った。最終結果を図 1 に示す。本研究では、学業的自己概念とエゴ・レジリエンスの間には有意なパスは認められなかったためモデルから削除した。最終モデルでは全てのパスが0.1%水準に (***) で示された。また、モデルの適合指標は、CFI = 1.00, CMIN/df = .867, IFI = 1.00, RMSEA = .000であり、良い適合度を示した。「身体的自己概念」、「社会的自己概念」、「情緒的自己概念」から「エゴ・レジリエンス」へ有意なパスが認められ、3つの尺度はエゴ・レジリエンスに正の影響を与えていることが示された。

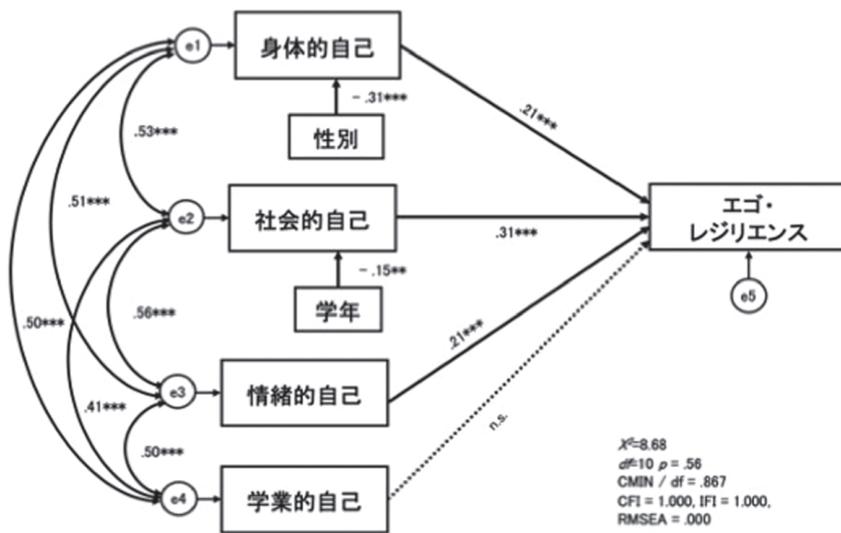


図1. 多元的自己概念によるエゴ・レジリエンスの予測モデル

考察

エゴ・レジリエンスと自己概念の関連性

本研究では、中学生を対象に自己概念とレジリエンスの関連性を明らかにし、思春期の発達段階における学年と性差を考察することを目的とした。自己概念の下位尺度とレジリエンスの相関分析を行ったところ、全ての項目において、有意な正の相関が認められた。また、学年を比較したところ、中学2年生は1年と3年生よりも自己概念が低い傾向がみられた。共分散構造式モデルでは、身体、社会、情緒の安定性に関する自己概念は、エゴ・レジリエンスに正の影響を与えることが示された。この結果から中学生にとって学業は重要であるが、学業に関する自己概念よりも身体的・社会的・情緒的自己概念がエゴ・レジリエンスを予測する可能性が考えられる。自尊心は学業成績と正の相関関係にあるだけでなく、自分に対する自信や物事に挑戦しようとする意欲とも関連していること報告されており、生徒の自尊心を高めることは、これからの社会で必要とされる「生きる力」を育むことにもつながることが考えられる（東京都教育センター, 2009）。また、中学生のエゴ・レジリエンスには友人との関係性が重要なことが示唆された。これらの結果から、友人からのソーシャル・サポートと自尊感情による肯定的な自己概念の育成はレジリエンスを高めるために重要な要素だと考えられる。

性別からみるエゴ・レジリエンスと自己概念の特徴

本研究では、先行研究（Liu et al., 2021）で報告されたエゴ・レジリエンス得点における性差はみられなかった。一方、自己概念の尺度の平均値を比較したところ、「身体能力」「数学」において男子のほうが高く、「正直さ・信頼性」と「国語」尺度においては、女子の方が男子よりも高かった。これらの結果は、先行研究の結果を支持した（Marsh, 1989; Nishikawa et al., 2007; 富岡, 2011）。

本研究では、身体の活動や魅力の認識が要素にある「身体的能力」と「身体的外見」の2つの尺度

において、性差が大きくみられた。若本（2011）が中学生を対象にした研究では、女子の方が男子に比べ「身体」に対する自己評価が低いことが明らかにされており、思春期の特徴である自己に関する悩みは女子の方が早く始まることから（栗谷ら, 2009）、本研究でも女子の方が「身体的能力」と「身体的外見」の二つの尺度が男子より低い結果となったことが考えられる。Harter（2006）は、女子は児童期から思春期にかけて自己評価が低下する背景として、社会文化的に押しつけられる美や成功の基準と自分の姿との落差から生じる身体に対する不満足感を挙げている。本研究では、「身体的外見」に関する理想自己の調査は行わなかったが、Harter（2006）の研究と16年の開きがあるため、現代のデジタル社会における「外見」の認識に性差があるのかを探ることで新たな知見が得られる可能性があると考えられる。

さらに本研究では、「同性との関係」尺度において女子に比べ男子のほうが有意に高いことが認められた。愛着関係における重要な他者が親から友人へと移行すると、思春期では友人との関係性が最も重要になってくる（若本, 2011）。その中で、男子は友人に頼ろうとしないつき合い方をする（和田, 1996）。一方、女子は共感や同情、あるいは悩みを打ち明けられることができるような精神的サポートを友人に期待し、友人との関係志向と親密さを特徴とする仲間関係の確立を求める（榎本, 1999；Prinstein et al., 2005）。対人関係に友人との親密性を理想とすると現実との乖離を経験しやすいことから、女子は男子に比べ仲間との対人関係を否定的に捉え、対人ストレスを抱える傾向にある（Prinstein et al., 2005）。

大村ら（2003）の研究では、中学生女子の方が男子よりも親に対するコミュニケーションが開放的であることが報告されているが、本研究では「親との関係」尺度に性差はみられなかった。本研究で使用したSDQII-Sの「親との関係」尺度では、両親との関係性の認識しか測定できないので、親と子の性別を考察する場合には父と母を分けた養育スタイルを測定する調査が必要になる。

学年におけるエゴ・レジリエンスと自己概念の特徴

本研究ではエゴ・レジリエンス得点は学年での差は見られなかったが、Alessandri et al.（2017）の先行研究の結果にあるように中学1年から高校3年生までの長いスパンで調べると変化がみられる可能性もある。本研究では、中学2年生が自己概念の尺度の得点が1年生と3年生よりも低い傾向がみられた。自尊心の変化を調べた先行研究では、小学校1年生から中学2年生まで学年が上がるにしたがって次第に自尊心は低下し、中学3年生で一時的に上昇するものの、高校生では再び低下傾向になることが報告されている（東京都教職員研究センター, 2009; Robins et al., 2002）。中学2年生の自己概念の低さは、自己概念の要素の一つである自尊心が大きく影響しており、ストレス対処法などの心理教育を用いることにより、よりよい自己概念の形成とエゴ・レジリエンス育成の手助けになる可能性が考えられる。これまでに横山（2010）が自尊心と体験的経験の関係を明らかにしていることから、達成感を感じることができる体験的経験や、他者から自分は認められているという実感を得られる経験を中学2年生に対して増やすことで、自己概念の低下を防ぐ可能性があると考えられる。

本研究の限界と今後の展望

本研究の限界点は以下の4点である。第1に、本研究ではサンプルサイズが比較的小さく、本研究の対象者は一つの学校から得られたデータであることから中学生の一般化可能性という点では限界が

ある。今後は、広い地域でさらに大きなサンプルサイズでの調査を実施することが求められる。次に、本研究では予測していなかった国語と数学の逆相関が見られた。この結果も、調査を実施した学校の特有な結果の可能性もある。第3に、本研究は横断研究であり、因果関係の方向性を示すことができない。最後に、Mesman et al. (2021) は青年期のメンタルヘルスと強く関連するレジリエンスの評価に社会的、文化的、家族的背景を含めることが、早期および予防的介入の目標を特定できることを示している。本研究は非臨床青年の自己報告式であることから、非臨床群と臨床群の比較研究も必要と考える。

本研究の利点として「科学的データから、柔軟に生徒を理解しようとすることができる」ということ、またER89とSDQ II-Sを使用した調査は、「生徒の内面的な個人情報と教員間で物理的に共有することができるため、より深く生徒を理解でき、問題点の早期発見や問題解決までの適切なアプローチができる」という点である。これをうけ、教員からみた生徒像と生徒自身の自己評価がどのように関連しているのかを測ることもできると考えられる。そのような目的で調査を実施する際には、生徒から十分な同意を得るなどさらなる倫理的配慮が必要になる。本研究では、エゴ・レジリエンスと自己概念の関連性が明らかになった。エゴ・レジリエンスを高めるための効果的な生徒へのアプローチとして心理教育を行い、コーピングスキルのトレーニング (Fenwick-Smith et al., 2018) やアクセプタンス&コミットメントセラピー (Ebrahimi et al., 2022) を実施し、自己概念をより高めることでエゴ・レジリエンスの向上にも繋がるのが考えられる。また、今後追跡調査を行いレジリエンスの変化のタイミングを明らかにすることにより、個人の発達段階に応じた継続的な指導へと展開していくことが可能になる。今後、ER89とSDQ II-S尺度を使用した研究が日本においても多く行われることが期待される。

引用文献

- Bentler, P. M. (1990). Comparative fit indexes in structural models. *Psychological bulletin*, 107 (2), 238.
- Block, J., Block, J. H., & Keyes, S. (1988). Longitudinally foretelling drug usage in adolescence: Early childhood personality and environmental precursors. *Child development*, 59 (2), 336-355.
- Block, J., & Gjerde, P. F. (1990). Depressive symptoms in late adolescence: A longitudinal perspective on personality antecedents. In J. E. Rolf, A. S. Masten, D. Cicchetti, K. H. Nuechterlein, & S. Weintraub (Eds.), *Risk and protective factors in the development of psychopathology* (pp. 334-360). Cambridge University Press.
- Block, J., & Kremen, A. M. (1996). IQ and ego-resiliency: conceptual and empirical connections and separateness. *Journal of personality and social psychology*, 70 (2), 349.
- Block, J., & Turula, E. (1963). Identification, ego control, and adjustment. *Child Development*, 945-953.
- Browne, M. W., & Cudeck, R. (1992). Alternative ways of assessing model fit. *Sociological methods & research*, 21 (2), 230-258.
- Bollen, K. A. (1989). *Structural equations with latent variables* (Vol. 210). John Wiley & Sons.
- Cho, Y. M. (2022). The Effects of Psychological Safety and Physical Self-Concept on Ego-Resilience in Nursing College Students. *Journal of Digital Convergence*, 20 (5), 877-884.

- Connor, K. M., & Davidson, J. R. (2003). Development of a new resilience scale: The Connor - Davidson resilience scale (CD - RISC). *Depression and anxiety, 18* (2), 76-82.
- Ebrahimi M., Ghodrati, S., & Kourandeh, H. V. (2022). The Effectiveness of Acceptance and Commitment Therapy on Resiliency and Self-Concept in children With Cancer. *Journal of Sabzevar University of Medical Sciences, 29* (1), 1-12.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis* (No. 7). WW Norton & company.
- Fenwick-Smith, A., Dahlberg, E. E., & Thompson, S. C. (2018). Systematic review of resilience-enhancing, universal, primary school-based mental health promotion programs. *BMC psychology, 6* (1), 1-17.
- Flach, F. F. (1997). *Resilience: How to bounce back when the going gets tough!*. Hatherleigh Press.
- Funder, D. C., & Block, J. (1989). The role of ego-control, ego-resiliency, and IQ in delay of gratification in adolescence. *Journal of personality and social psychology, 57* (6), 1041.
- Giedd, J. N. (2015). The amazing teen brain. *Scientific American, 312* (6), 32-37.
- Hall, G. S. (1904). Adolescence in literature, biography, and history. In G. S. Hall, *Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion, and education*, Vol. 1, pp. 513-589. D Appleton & Company.
- Holmes-Smith, P. (2001). Introduction to structural equation modeling using LISREL. *ACSPRI-Winter training program, Perth*.
- 畑 潮・小野寺 敦子. (2013). Ego-Resiliency 尺度 (ER89)日本語版作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 22 (1), 37-47.
- 石毛 みどり (2003). 中学生におけるレジリエンスと無気力感の関連 人間文化論叢, 6, 243-252.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連 受験期の学業場面に着目して 教育心理学研究, 53 (3), 356-367.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2006). 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究, 14(3), 266-280.
- 井上 比呂子 (2009). 小学生の自己概念: 学校現場における尺度の有用性の観点から 創大教育研究, (18), 69-83.
- Liu, Q., Jiang, M., Li, S., & Yang, Y. (2021). Social support, resilience, and self-esteem protect against common mental health problems in early adolescence: a nonrecursive analysis from a two-year longitudinal study. *Medicine, 100* (4).
- Marsh, H. W. (1989). Age and sex effects in multiple dimensions of self-concept: Preadolescence to early adulthood. *Journal of educational Psychology, 81* (3), 417.
- Marsh, H. W., Barnes, J., Cairns, L., & Tidman, M. (1984). Self-Description Questionnaire: Age and sex effects in the structure and level of self-concept for preadolescent children. *Journal of Educational psychology, 76* (5), 940.
- Marsh, H. W. (1992a). Self Description Questionnaire (SDQ) II: A theoretical and empirical basis for the measurement of multiple dimensions of adolescent self-concept: An interim test manual and a research monograph. *New South Wales, Australia: University of Western Sydney, Faculty of Education, 53-63*.
- Marsh, H. W. (1992b). Self Description Questionnaire (SDQ) III: A theoretical and empirical basis for the measurement of multiple dimensions of late adolescent self-concept: An interim test manual and a research monograph. *New South Wales, Australia: University of Western Sydney, Faculty of Education*.
- Marsh, H. W., Ellis, L. A., Parada, R. H., Richards, G., & Heubeck, B. G. (2005). A short version of the Self Description Questionnaire II: operationalizing criteria for short-form evaluation with new applications of confirmatory factor

- analyses. *Psychological assessment*, 17 (1), 81.
- Masten, A. S. (2001). Ordinary magic: Resilience processes in development. *American psychologist*, 56 (3), 227.
- Mesman, E., Vreeker, A., & Hillegers, M. (2021). Resilience and mental health in children and adolescents: an update of the recent literature and future directions. *Current opinion in psychiatry*, 34 (6), 586.
- 中村 直美・内田 一成 (2007). 中学生における他者への愛着とレジリエンスとの関連について--性差についての臨床心理学的研究 上越教育大学心理教育相談研究, 6 (1), 1-11.
- Nishikawa, S., Norlander, T., Fransson, P., & Sundbom, E. (2007). A Cross-cultural validation of adolescent self-concept in two cultures: Japan and Sweden. *Journal of Social Psychology and Behavior*, 35, 269-286.
- Nishikawa, S., Sundbom, E., & Hägglöf, B. (2009). Influence of Parental Rearing on Adolescent Self-Concept and Mental Health in Japan. *Journal of Child and Family Studies*, 19, 57-66.
- Nishikawa, S., Hägglöf, B., & Sundbom, E. (2010). Contributions of attachment to Self-concept and Internal and Externalizing Problems among Japanese Adolescents. *Journal of Child Family Studies*, 19, 334-342.
- Nishikawa, S., Fujisawa, T. X., Kojima, M., & Tomoda, A. (2018). Type and timing of negative life events are associated with adolescent depression. *Frontiers in psychiatry*, 9, 41.
- 小野寺 敦子 (2009). 親子関係が青年の無気力感に与える影響: エゴ・レジリエンスが果たす機能 目白大学心理学研究, 5, 9-21.
- 長田 春香・岩本 文月・大秦 加奈子・岡田 洋子・蒲原 由記・筒井 翔子・... & 関 秀俊 (2006). 中学生の日常的ストレスにおけるレジリエンスの意義 小児保健研究, 65 (2), 246-254.
- Oshio, A., Taku, K., Hirano, M., & Saeed, G. (2018). Resilience and Big Five personality traits: A meta-analysis. *Personality and individual differences*, 127, 54-60.
- Prinstein, M. J., Borelli, J. L., Cheah, C. S., Simon, V. A., & Aikins, J. W. (2005). Adolescent girls' interpersonal vulnerability to depressive symptoms: a longitudinal examination of reassurance-seeking and peer relationships. *Journal of Abnormal Psychology*, 114 (4), 676.
- Robins, R. W., Trzesniewski, K. H., Tracy, J. L., Gosling, S. D., & Potter, J. (2002). Global self-esteem across the life span. *Psychology and aging*, 17 (3), 423.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. (1976). Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of educational research*, 46 (3), 407-441.
- Shemesh, D. O., & Heiman, T. (2021). Resilience and self-concept as mediating factors in the relationship between bullying victimization and sense of well-being among adolescents. *International Journal of Adolescence and Youth*, 26 (1), 158-171.
- 清水 美恵・相良 順子 (2019). 中学生のレジリエンスと適応との関連モデルの検討—対人関係に注目して— 応用心理学研究, 45 (2), 105-114.
- 東京都教職員研修センター (2009). 自尊感情や自己肯定感に関する研究 —幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方— 東京都教職員研修センター紀要 / 東京都教職員研修センター研修部教育開発課 編 (8) 3-26.
- 富岡 比呂子 (2011). 日米の小学生の自己概念——自己記述質問票 (SDQ-I) の心理測定的検討 パーソナリティ研究, 19 (3), 191-205.

- Tugade, M. M., & Fredrickson, B. L. (2004). Resilient individuals use positive emotions to bounce back from negative emotional experiences. *Journal of personality and social psychology*, 86 (2), 320.
- 横山 正幸 (2010). 子どもの自尊感情と体験の関係について 生活体験学習研究, 10, 53-62.
- 和田 実 (1996). 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 The Japanese Journal of Psychology, 67 (3), 232-237.
- Westenburg, P. M., & Block, J. (1993). Ego development and individual differences in personality. *Journal of personality and social psychology*, 65 (4), 792.

付録

SDQII-S尺度の概要

1. 身体的能力（スポーツや身体活動に関するスキルと関心の自己認識）
 2. 身体的外見（身体的魅力の自己認識）
 3. 同性との関係（同性の仲間における人気評判についての自己認識）
 4. 異性との関係（異性の仲間における人気や評判についての自己認識）
 5. 親との関係（両親との交流における自己認識）
 6. 正直さ・信頼性（正直さと信頼性における自己認識）
 7. 情緒の安定性（感情的な幸福と精神病理学から離れた自己認識）
 8. 数学（数学と推論に対する能力、楽しさ、興味に関する自己認識）
 9. 国語（国語と読書に対する能力、楽しさ、興味に関する自己認識）
 10. 学校全般（学校における教科の能力、楽しさ、関心に関する自己認識）
 11. 一般的自己（自尊心、自信、自己への満足に関する自己認識）
- 総合的自己（様々な領域における思春期の自己評価を反映する11尺度の合計；尺度1～11）
 - 学業的自己（学校の教科と特定の科目に関する自己概念；尺度8, 9, 10）
 - 非学業的自己（より具体的な領域への社会的、感情的、身体的自己概念；尺度1～7）

Shavelson et al. (1976) の多次元的自己の概要

- 身体的自己（身体的能力と身体的魅力；尺度1, 2）
- 社会的自己（親や友人との関係性；尺度3～5）
- 情緒的自己（情緒の安定と自尊感情；尺度6, 7, 11）
- 学業的自己（学校の教科の能力や関心；尺度8～10）